座談会
「聴覚障害児の障害認識と社会参加をめぐって」

A：私たちは平成１３年度から今年度まで「聴覚障害児の障害認識と社会参加－多様な連携と評価を中心に－」というテーマで研究を進めてきました。これに先立つ平成１０年度から１２年度までの「聴覚障害児の障害認識と社会参加－自立活動を中心に－」から数えますと６年間の研究となります。この間に「障害認識」という言葉や視点は聾教育の中で日常的に語られるようになってきたように思います。ここではこの三年間、あるいはその前の三年を合わせた六年間で、「障害認識」に関する聾教育や社会の状況についてどのような変化を感じていらっしゃるかを話していただきたいと思います。またそれに加えて「障害認識」に関連して今後取り組んでゆくべきこと、考えていくべきことは何かをお話しいただきたいと思います。

B：先の３年間は「障害認識」が幼稚部段階でも重要なんだということを、教員が認識するために材料を頂いたような感じでした。学校へ帰って協議会の内容を報告するたびに、他の教員が「そういえばうちのクラスでもこういうことがあった」と話し、案外そういったエピソードがあったんだということが驚きをもって迎えられました。「障害認識」と言う視点が大事なんだということを一つ一つ確認した３年間だったような気がします。そしてこの３年間は、すでにそういうことが当たり前になり、子どもからそういうつぶやきがでたときには、自分だったらどう対処しようかなと意識し、それなりの構えを持って保育をしているので、子どものエピソード一つ一つにそんなに驚かなくなっています。それと聾の教員がいて自分たち（聞こえる）教員がいるというのが当たり前になっているので、子どもたちのエピソードを普通の成長過程として捉えるという教員側の意識の変化があると思います。新しく来られた先生には、それなりにとまどいがあるようですが、ベテランの先生はこういうことはあるんだと感じるようになってきているんです。それと親御さんについては、むしろこの３年間は親御さんに引っ張られている感じです。こちらが支援するというよりは、親御さん同士の中で話し合ったり解決したり、情報交換したりと教師を超えた動きを見せているところがあるので、それに教師がついていく方が大変かもしれません。そういうことも考えると、保護者への支援は教師から提供するばかりではなくて、親御さん側から問題意識を引き出し整理して、それに対して教師が答えを用意するだけではなく、大人の聾の人の力を借りるとか、他のところから力を借りる必要があることをこのごろ感じ始めています。子どもの方はたぶん大きくは変わってはいないのですね。環境は変わってないのですが、大人側の問題意識が変わって、そういった変化が子どもに投影されているのかもしれません。

A：早期教育の段階の子どもたちの障害認識に教師が気づくようになったことが、B 先生の聾学校全体へ良い影響を与えているということはありますか？

B：障害認識を小さい子ども達に当てはめて考えた場合に、聞こえないことへの直接的な気づきだけではなくて、もう一つコミュニケーションに対する自覚や行動も大事な柱と捉えています。そのように考えると、０歳児が大人の会話を交互に見るということも障害認識の大切な育ちです。聴覚障害児は言語発達に焦点が当てられがちで、人との関係やコミュニケーションの行動の発達はあまり注目されてこなかったのではないかと思いますが、

０歳児から人の会話に関心を持つことも大切な障害認識だよねと親御さんとも話題にするようになったんですね。そこから、コミュニケーションにかかわる自覚や人との関係、自分を人にどう説明するかということなどにつながっていくので、親も教員も、障害認識について常に考えていくことで子どもの発達に対する構えが少し広がったように思います。

A：ありがとうございました。それではＣ先生、この６年の間に担当の学部が変わられたこともありますが、「障害認識」に関して子どもさん、先生の様子、親御さんの様子などに変かを感じることがありましたらお話ください。

C：６年前、聾学校内で学校の運営方針に関する会議がもたれ、その中で障害にたいする受けとめ方が議題になりました。いままで長い間学校の教育目標の中に「聴覚障害を克服するという」文言がありました。それまで私はこの言葉（障害の克服）に違和感を持っていたのですが、それに換わる考えを十分に説明できる自信がありませんでした。ただ、その会議の時に聴覚障害の克服の意味は何ですかと聞いてみると皆さん黙ってしまいます。加えて聴覚障害を克服する意義は何ですかと聞いてみると、この言葉が１０何年間長らく使われてきたのにもかかわらず、誰も答えることができないんですね。私はびっくりしてしまいました。逆に、聴覚障害をどう受け止めるのですかとそのイメージをきいてみると、これもまた同じようにだれも答えることができません。そのときに障害をプラスの方向でとらえてみる視点が必要ではないかと提案し、５年前ぐらいから「障害認識を育成する」という方針に変わってきました。その前までは聴覚障害の先生が何かの機会に発表されるときにも「障害の克服」が大事ですと話されていました。それはおかしいのではないかと、学校運営方針のことも絡めて、いろいろと協議してきた結果、障害に対する受け止め方をマイナスで考えていくのではなく、プラスで考えていくということが大事であるという風に変わってきました。そのような変化の中で、親たちの中から、「障害を受けとめていくためにも、コミュニケーションを進めるためにも手話も必要。ただ、中学部からの手話導入は遅いので、小学部から導入してほしい」という要望が出されました。小学部の中でも手話はコミュニケーションや障害認識の為にも必要であるという風に議論がされるようになり、そうした背景などがあって、３年前に私は小学部に異動することになりました。その時は、だいたい５年生か６年生を担任することになるんだろうなと思っていましたが、実際には小学部１年生を担当することになりました。この学年には、聞こえない保護者がいることから、子ども達も保護者も手話で話すことができました。だから、コミュニケーションがはかりやすく、そのぶん保護者や子どもたちの障害認識の育成にいろいろなアプローチをしていくことができました。ただ、小学部の中では短絡的に手話導入イコール障害認識ととらえていくのではなく、どのように子どもたちの障害認識を育成していくのかと、議論をしていきました。キュードスピーチの使用をどう考えていくか、きこえないことをどうとらえていくかなども議論していきました。やはり、きこえない人たちに対する具体的なイメージを親や子どもや教師が持つことが大切だと思います。その意味では「今学校で障害を認識させなければならない」という考えをもたれることに懸念しています。「障害」と言えば「認識するもの」と答えなければならないというように、「障害認識」という言葉が現場でお題目の様に唱えられ、障害というものが何なのかという基本的なこ

とが抜けてしまっていないかという危惧を感じています。「障害を認識していきましょう」、「障害認識を教えましょう」と言うのではなく、日常生活の中で自然に身につけさせていくことが大事で、聾者であることを自然に受け止められる環境づくりが重要です。そういうことから、幼稚部、小学部、中学部、高等部のそれぞれに、きこえないことをモデルから学び取る意味で、聴覚障害の先生が必要になります。その先生達同士で「きこえないことをどう考えるのか、どう受け止めていくのか」を議論して、学校全体に投げかけていくことも必要だと思います。また、日本手話、日本語手話をはじめ、いろいろなコミュニケーション手段にも精通していかなければなりません。これは聴者教員にも同様で、教師がもっとコミュニケーション技術のレベルを上げていくこと、きこえないことの理解と支援を幅広く身につけておくことが重要だと思います。このように、「障害認識」を学校全体で推し進めていくためには、議論を重ねながらすこしずつ整理しなければならないと思っています。これからの課題ではないかと思っています。

A：ありがとうございました。障害認識という言葉はずいぶん使われるようになってきたけれども、使われ方が硬直化している様子があるということを話していただきました。次に D 先生は６年前は聾学校、３年前に中学校に移られたわけですから、単純に比較はできないと思うんですが、この６年間でも結構ですし、３年間でも結構ですので、障害認識に関して何か変わったことがあったらお話し頂きたいと思います。

D：６年前には聾学校の管理職になった時、先生達が指導することだけに目を向けているように感じました。子どもの育ちに目を向けず、自分の受け持ちの子どもの指導のためにどんなコミュニケーション方法が良いのか、何を教えたらよいのかといったことが、一番の関心事の様に感じられました。もっとひろい目で子どもの成長を見ながら、先生の仕事がなんなのかということを考える習慣や意識が見あたらなかったように思えます。それから３年たったわけですが、何が変わったかというと先生の人事異動が頻繁で、徐々に積み上げたものが異動でゼロになると言う繰り返しが多く、そのためにベテランの先生達の負担が大きくなっています。管理職に聾教育の経験がなければ学校全体をまとめて一つの方向に向けていくことを教師全員に示すことはむずかしいと思います。その３年間が終わって普通の中学校に変わったわけで、その後の３年間は聾学校の現場からも離れてしまった。一年に一度講演に呼ばれますけれども、講演が終わった後の質疑やアンケートに毎年同じ質問がでるという経験をしました。学校の組織の上に立ってまとめる立場からみていますと、先生達が教えあいながら情報交換していく、教え方を盗みあうということは、聾学校だけでなく小・中学校でもあるのではないかと思います。ただ最近の先生達はお茶やお酒を飲みながら互いに生徒の様子や家庭の様子について話し合うことはありますが、子どもの指導方法や教え方の課題などについて気楽に話し合うことはあまりないようです。だから障害の認識ということについては一見わかっているようでも、実際には表面的で深みがないと感じます。最近は「障害認識」という言葉がいろいろな本や雑誌にたくさん出てきて、先生達もよく使っているのですが、先生達がどれだけわかって使っているのか疑問に感じます。聾学校は F 先生が書いていたように、毎年のように異動が多くて残ってほしい先生が転出していくこともあり、先生方の意識が非常に変わってきているということを

感じます。中学校に赴任して今は外から聾学校を見ているのですが、中学校はともかく忙しい。生徒指導の問題がおこれば、すぐに対応しなければならない。それを考えれば、聾学校はもっと時間を有効に使えば教育に対する議論の時間を確保できると思うんです。逆に中学校の先生は、教育課程をどう変えるかなどはあっても、コミュニケーションの問題とか、どういう教え方をすべきかとか、授業の在り方はどうかという議論はあまり聞きません。それぞれの学校で研究会はやってますが、割り当てられたなかば義務の様な形で行っている現状にあります。そういった意味では、聾学校はもっと時間を有効に使えば、良い先生が増えるのではないかと最近特に感じています。

A：ありがとうございます。変化というよりも積み重ねがうまくいかない状況を話して頂きました。もう一つは意識についてで、以前は聾学校で指導法とか子どもの見方だとかをいろいろと深く話し合いしてきたんだけれども、最近はそういったことに関心がもたれなくなってきたということを話して頂きました。

E 先生は高等学校の生徒を教えていて、聞こえる子ども達の障害に対する理解・認識の変化についてこの６年間の間で感じるものはありますか？聴覚障害児の障害認識というよりは聞こえる生徒の障害理解あるいは障害者理解と言うことになるかもしれませんが。

E：いろいろと変化があったと思います。H 高校にきて８年目になります。H ははじめから、福祉コースを設けて「人に優しい社会づくり」というタイトルを掲げて取り組んでいますが、当初の頃は生徒にしてみれば障害者問題等は上から教えてもらうというイメージが強かったと思います。また聾学校との交流も３～４年間は続いていましたが、途中でなくなってしまいました。理由はいくつか考えられるのですが一つには、「障害のある人だから何かしてあげよう」という同情的な態度が残っていたのではないかと思います。しかし聴覚障害者である私が H 高校に赴任してからは、少しずつ障害者への接し方・つきあい方が変化してきているように思います。当初は障害者だから一生懸命きいてあげるという気持ちが前面に出ていた。はじめて障害者に出会って構えてしまうことは誰にでもあることなのですが、そういう場面を生徒がどうやって乗り越えていくか、そこが肝心なところ。私たち教師の力量、見識が問われるところだと思います。で、構えてしまう生徒をどう引っ張っていくか。「気づき、考え、行動する」という問題解決のためのプロセスを踏んで作業をしていく。そうして障害のあるなしを意識するのではなく、お互い同じ目線で付き合ってほしいという意味で生徒をサポートしてきましたけれども、今の生徒たちはだいぶ成長したんだなと思います。一般コースの生徒も福祉コースの生徒も、手話は達者とはいえないけれども、ツボを抑えているというか聞こえない人と気持ちをうまく通わせる場面が増えてきたのはうれしいことです。また教職員集団の意識や対応も変わってきたと思います。当初先生方には、障害者問題ははるかに理念的なイメージというのが強かった。でも、現在は私の他にも聞こえない先生がいたり、肢体不自由の先生もいたりと、いろいろな先生が H 高校に赴任してきてあらゆる場面でぶつかり合いながらも学びあっている。また聾学校での勤務経験がある先生もいて、たとえば会議の時に健聴者のペースではなく聞こえない先生のペースに合わせて進めてくれたりもする。このような雰囲気が以前よりも増えてきたように思います。普通の学校ですから「障害認識」という言葉はあまりなじ

みがないのですが、相互理解によって現場では誰でもが対等に仕事をするとか、気兼ねなくコミュニケーションするというような空間ができつつあるように感じます。いわばバリアーフリーないしユニバーサルデザインの取り組みをしているようなものでしょうか。ところで、本校は福祉教育に力を入れており、地域や生徒のニーズも手伝って、福祉のみならず一般クラス向けにも手話や点字の講座を夏休みに開講したり、２年３年次の選択科目に手話の学習を用意するなど福祉関係のカリキュラムや企画がこのところ増えています。猫の手も借りたい忙しさです。もっと障害のある教師が増えるといいなと思っています。生徒たちが、私のような障害のある人と日常的につきあっていくなかで、お互いの社会的「障害認識」を深め合うこと。そしてそれが周囲の人々に影響し、あるいは町の中へ広がっていくといいですね。実際、本校の生徒がアルバイト先でろうのお客様に手話で応対して喜ばれたとか、またそれがきっかけでその職場での手話指導を生徒が任されたとかそういう話を聞きます。目に見えないところで「障害認識」を深める作業がなされているんだなと実感しています。

A：ありがとうございました。いろいろ変わってきた部分について語って頂きました。F先生お願いします。

F：私の場合、子どもを継続して見ているわけではなく、学生も毎年変わっていくので、６年間の変化を学生に見ることはできないんですが、私自身の変化というのはあります。わたしは、学生に言語指導を教えています。以前ですと聴覚障害児の言語力にはこういう問題があり、それに対しての指導にはこういう方法があるということを教えることが単純にいえば仕事だったんです。それで、この「障害認識」に関する研究プロジェクトに入ることによって、話しを聞いて自分なりに考えることで、話しに厚みを加えることができました。こういう問題があるからこういう方法で解決するんだということだけじゃなくて、どうしてそういう問題が起こるのかということを話すようになりました。また学生達は、私が聴覚障害児の言語力には問題があるという話しをするもので、知らず知らずのうちに聴覚障害児に学習する能力がないとか記憶する能力がないんだという風に思っていたかもしれない。それは本当は子ども達の問題ではなくて、環境の問題であったり聴力の問題だったりするんだという話しをすることができるようになりました。また入力の保障ということで聴覚の保障について話すのですが、これまでは情報や言語入力の欠如を補うハウツーについて話していましたが、今はなぜ足りなくなるのかという話しができるようになった。それがわたしの内部での変化です。また大学の講義だけでなくて、他の大学の集中講義や認定講習の中で必ず、「受容と克服」から「認識」へという話しを入れるようになりました。この研究所で出す報告書を材料に話しをしますので、今後出る報告書と併せて講義ノートを作って半日くらいの講義を組もうかなと考えています。一般の小・中学校では以前は LD や ADHD は躾の問題とされていたのが、今は子どもを正しく理解すれば正しい対処ができるんだという考えに変わってきている。いうなれば障害の認識だと思うんですね。今までは障害だと思われずに、注意が散漫だと思われていたのがそうではないんだということです。そういう波が社会的にきているので、「障害認識」はその波に乗るテーマだと思います。

それから、この研究が始まった頃には指導・教育という言葉が支援や援助という言葉に変わっていくところでしたので、このテーマはタイムリーだと思い参加させていただきました。まわりの変化というよりも自分の変化を述べました。

A：ありがとうございました。協力者の方々に障害認識を巡る変化についてお聞きしました。やはりそれぞれの先生が変化を意識されていました。「障害認識」については正しい理解や課題解決の方向も重要ですが、障害について、また障害を通して考えることや、障害のある人々と出会うことの大切さをそれぞれの方からお話しいただきました。

次に障害認識に関して今後私たちがどのような活動をしてゆくべきか、あるいはどのような方向が期待されるのかについてお話しいただきたいと思います。

F：私の立場からは認定講習などでの「障害認識」の扱いが考えられます。今後認定講習がより盛んになると思うんです。というのは、50，30，20 という数字があるんです。養護学校で養護の免許を持っている人が約 50%、聾学校での当該免許保有率が 30%、盲学校では 20%というものです。この状況に対して免許の保有率を高めようという目的で全国的に認定講習が盛んになっているんですね。それからもう一つは免許法が変わるということです。いわゆる総合免許への動きです。総合免許は盲・聾・養護関係の科目が全部はいるので、私なんかはあちこちの大学で講義する機会が増えると思うんです。そういったときに私たちの考える障害認識というのはこういうものだという薄い冊子のような資料があるとよいと思います。また C 先生が考えた実際のカリキュラムなどの資料もあればよいと思います。そうすれば、少なくとも I 県周辺では出回るのではないかと思うんです。もし、それが良いものであれば全国にも広がるんではないかと思います。

A：ありがとうございます。それでは E 先生、お願いします。

E： 本校の福祉教育は、地域から生徒からのニーズによって今後も発展していくものと思われます。本校見学に見える中学生への手話体験教室とか、総合的な学習の時間での手話指導や障害者の講話など今までになかった新規の企画が出たりします。となると運営上、障害のある教師でないと動けない部分もあるわけで、勢いこちらに仕事がまわってきます。やはり量的には増える一方の仕事なのでさすがに私一人では背負いきれない。人事面でできるだけ障害者で経験のある教師や講師をどんどん採用配置してほしいと思っています。それから、聾学校などとは今までの単発的な交流だけでなく日常的な交流、出会いの場面も創り出していく必要がある。本校は残念ながらそういう面が弱いけれど、地元のろうあ協会の方に頼んで手話の部活に毎週 1 回指導員としてきてもらったりするなど努力はしています。また何年か前に東北地方のある聾学校の生徒さんがわざわざ本校に来られたことがあった。目的は聴こえない先輩の仕事ぶり活躍ぶりを現場で見学させてもらい自分の進路に生かすということにあったのですが、この真摯な生徒さんの態度がかえって本校の生徒に好ましい影響を与えた。今でも携帯電話でメールをやり取りしているとのことです。このように障害のない生徒が「障害認識」を深める手だては、日常的な接点というか付き合いの場面を創り出していくことにあるのではないかと思っています。

A：ありがとうございました。ではC先生に今後の障害認識を育てる活動について何かありましたら何かお話し頂ければと思います。

C：今後について何が大切かというよりも、心配なことがたくさんあります。たとえば人工内耳や新生児スクリーニングの問題、また日本手話の視点からの「聾児の人権救済」など、ろう教育をめぐる動きが二極に分かれているように感じています。両極間の真ん中の部分がだんだん浅くなっているのではないかと思っています。きこえないことを公正に受けとめて、適切な環境を作っていくことが大事です。様々な環境の中で、障害の受けとめができるのか、それをきちんと分析をして、聾のことを受け止めるにはどうすればよいのか、聾児として聾者としての受け止め方をはっきりしていかなくてはなりません。またその聾の子どもの親たちにどう支援していかなければならないのか、聾学校、難聴学級などについてもどういった支援が必要なのか、病院の医者などに対してもどう支援していくべきなのかということが大きな課題になっていくのではないかと思っています。聾者・聾児に対しての障害の在り方をはっきりつかんで、それをもとにして環境を分析していく必要があると考えています。そのことがないと障害認識の問題はなかなか進んでいきません。基本に戻って問題はなになのかということをきちんとつかんでいかなくてはなりません。障害認識について基本を考える、それらが大事なところなのではないかと思います。

A：ありがとうございました。ではD先生いかがでしょうか？

D：わたしはいつも学校の管理職の立場から考えてしまうわけですが、先生達の意識を変えるためには、まずは管理職の意識を変えなければならないと言うことが前から言われています。実際にわたしも意識を変えるつもりでやっているわけですが、聾学校に限って言えば、管理職の障害認識を調べてみたいという気がします。障害認識を理解しないまま先生を指導することで、保護者と対応する場合などに、現場の先生とのズレが出てくるのは怖いと思います。その意味で聾学校の管理職の意識を変えていくと言うことが、一番の課題になるのではないかと思います。管理職の意識を変えるために何をすればよいのかどこでやるべきかも問題になると思います。自分として他の管理職との関わりの中で、少しでも雰囲気を変えられる様にしていくことが必要なんだと考えています。具体的な方法は持ち合わせていませんが、自分と出会った人には働きかけていきたいと思っています。それが自分の課題だと思います。

A：ありがとうございます。ではB先生はいかがでしょうか？

B：聾学校というのは、子どものアイデンティティーをはぐくむには非常に安定した場だと思うので、子どもに対しては、コミュニケーションの環境を整えたり聾の先輩に出会わせていくなどの配慮をすれば、子ども自身で学んで、形成していくことが十分可能であると思っています。今後もっとやっていきたいのは、むしろ教員自身が考え続けるという努力です。それをしないと、例えばコミュニケーション・ルールなどはなおざりになってし

まいますし、聾の方々に会う努力も滞ってしまいます。子どもへの指導をを云々する以前に、教員自身がどうあるべきか絶え間なく考えていかなければならないと思っています。また親御さんについても、コミュニケーションへの支援や聾の方々との出会いを丁寧に支援していくことで、ご自身の足で歩き始め、子どもの視点で考えられるようになる親後さんは多いと思います。しかしその一方で、はじめの一歩が繰り出せない親御さんがいらっしゃるのも確かです。今回はそういった難しいケースについてうまくまとめられなかったので、今後の自分の課題として、親御さんのおかれている立場や環境など一つ一つのケースについて改めて考えていきたいと思っています。障害認識は、もしかすると聾学校以外の場面、例えば医療機関や社会情勢などの影響も大きいと思われますので、外に向かって発信していくことも考えていかなければならないと思います。

A：G 先生、これまで皆さんのお話をうかがい、３年間をまとめてどのように感じられたでしょうか？

G：私は前回の研究の途中から、計４年間ご一緒することができました。障害認識という言葉は最初なじみがありませんでした。私としては「障害の受容」という言葉が一般的な時に子どもと関わっていましたから、「受容」ということばから「障害認識」という言葉に変化する中で、今このことが聾教育の内容にどんな影響を与えるのかをじっくり考える良い機会だったなと思っています。私が今一番大事ではないかなと思うのは、もう一度子どもが発している言葉にならない言葉を先生達が受け止めることなのではないかなという気がしています。本報告書の中の道徳の事例にあった何気ない日常生活の一こまにもいろいろな要素があるわけです。それを扱うか扱わないか、取り上げて考えるか考えないかということが聾教育の本質関わる大事な要素があるのではないかと思います。もちろん教科や自立活動というのは大事なことなんだけれど、もう一度子どもが今何を考えているのか、何を自分に問いかけているのかということを考えたい。自分に問いかける機会を大事にして行かなくてはならないと思っています。だから、「障害認識」という言葉には幅の広い意味があると思いますが、子どもや保護者から吸収したものをまとめて障害認識を理解していくということが大事かなと思っています。このことは聾教育では当たり前になってきていますが、他の障害種別ではあまり話題にならないように思います。ある意味で聾教育は子どものことを考えながら一生懸命先を見ていることの証だと思います。得意がるわけではありませんが、それだけ誰もやっていないことで、大変ではあるが必要なことなのだと思います。これから何ができるか、簡単な小冊子がまとまれば良いですし、それが先々の発展のきっかけになればよいと思います。